

はじめに

祭礼積雪の都市・弘前

弘前市は森の国である。白神山地と八甲田に囲まれた津軽地方の中心都市として栄えた。森の国からの自然の恵みと変異を受け入れ畏敬の念を抱きながら、弘前の人びとは生きてきた。この都市の地域社会を理解するためには、森の国ならではの地域の中に織り込まれた祭礼と雪のことを知らなければならない。

長い雪の時期を終え、弘前は花の季節を迎える。町のいたるところに水仙、こぶし、梅、桜、りんごの花が咲く。住民が春に強い解放感をいただくのは冬の長さのせいかもしれない。弘前の人々は身短い春を謳歌し、心は祭りに向かう。6月になると土地の氏神様の大祭前夜祭の宵宮(ヨミヤ)が市内各地で開かれる。この時期に市内を歩くと、祭りの路地に迷い込む。7月の終わりの時期まで、市内で50数カ所の町内で行われる路地の小さな祭りである。その頃には、ねぶた小屋が建ち始める。白い仮設のテント小屋が空き地や公園に建てられ、8月上旬のねぶた祭の準備が始まる。この白テントは住民の学習と交流の施設でもある。この時期には、弘前の典型的な音風景をみることができる。テントの中でねぶたの制作と笛、鉦、太鼓を学びながらの大人と子どもの交流が進められるからである。最近では観光化したとはいえ、ねぶたは弘前の地域性を育み表現する歴史と伝統のある祭りであることは変わらない。ねぶたが終わって、秋空が出るころに集団登拝儀礼の「お山参詣」がある。津軽の霊峰岩木山の山頂に向かって、練り歩く。夏の始まりから秋に向けて、弘前の人びとは昔ながらの都市に伝わる祭礼とともに生活している。秋の深まりは岩木山の山頂付近から始まる。黒い山の色が色を帯び、徐々に弘前の市内に到達する。まさに錦秋の季節である。

秋が過ぎて雪の冬。11月下旬から弘前は雪国に変身する。順雪、耐雪、克雪、利雪、親雪という雪の世界が弘前の町で繰り広げられる。雪になじみ、雪に耐え、雪をのりこえ、雪を使い、雪に親む。ところかまわず降り積もる雪。家屋の入口をふさぎ、隣の家を境目を埋める。道という道を狭く細いものにする。雪は人びとの視線を空、山、道、自分の家の敷地、隣の敷地、空き地などにいやおうなく導いていく。降る雪のこと、積もる雪のこと、除排せつする雪のこと、暮らしのこと。まさに雪とともに過ごす4か月である。家の前の自分の雪、隣接する敷地や道路の他人の雪、自分で片付ける雪、隣の人が片づける雪、大きな機械で除排せつする雪。雪の世界からみえる社会が現れる。森の国の弘前。祭礼は人びとの精神性を育み、積雪は隣の家、小さな範囲の地域、行政との距離感等を意識させてきた。それらを確認し共有することのできる空間的広がりが町内だった。それらの社会を取りまとめるしくみが町内の町会(町内会)だった。

ところが、祭礼積雪都市・弘前にも都市生活における脱季節性と等質化の波が押し寄せている。全国のどこにでもある暮らしぶり、季節の変化がどうであれ1年を通じて同じような生活スタイルを続けることが弘前にも広がっている。東京と同じような生活が浸透しながら、弘前に根付いた祭礼は観光化が進められた。観光化が容易ではない積雪生活はうとましいものとして忌避されるし、除雪を行政に依存しようとする。そして、町会の役割を行政依存に振り向けようとし、町内の自立に向ける動きを小さくしてしまっている。

3.11のインパクト

3.11 東日本大震災の弘前市への被害は軽微なものであった。しかし、震災時に被災地の子どもが弘前大学にいた。この日は受験の日の前日に当たっていた。試験は行われなかったが、弘前市と大学は彼らにとっての当面の居場所づくりが求められた。それが3.11の最初のインパクトだった。しばらくすると、岩手県野田村や八戸市等への被災地支援が行われた。弘前市長の強いリーダーシップによるものだった。野田村には市民、学生、市職員ของทีมによって直接的な支援が実施された。それも1年を通じて繰り返され、職員派遣をはじめとした支援は今も続けら

れている。

繰り返される被災地支援は弘前市と住民にとっての災害対応の学習であったといっている。繰り返された被災地支援は自然災害を対岸の火事としてではなく、自分たちの地域の備えに結び付けようとした。弘前市の防災の備えの不十分さと地縁を中心とする自主防災のしくみづくりが喫緊のテーマだと認識されるようになった。その中心的な役割として、町会が注目されている。

町会運営の指南書の存在

昭和 38 年(1963 年)10 月に『「町会のあり方」について—町会とはどういう組織体なのか』という小冊子が印刷された。B6 判 30 ページに町会は地域住民の生活組織である趣旨、町会の政治的中立性に関する申し合わせ、町会連合会会則を掲載している。発足から 4 年目の弘前市町会連合会によるものであった。この冊子は 1965 年、70 年、79 年、88 年と版を重ねて地域住民及び町会運営担当者に配布され読まれていった。

2000 年 5 月に同じ町会連合会から「増補版生かしの地域づくり」が出版された。その「発刊によせて」には次のように記述されている。すなわち、「…近年、組織内役員の高齢化や成り手不足、核家族化に伴う加入率の低下傾向が顕著になっております。また余暇時間の増大と価値観の多様化に伴い、町会の枠を越えたボランティア・職場・趣味を通じたグループ活動が活性化しており、その反面、町会活動に対する関心度の低下等につながるなど、町会を取り巻く環境は厳しい状況になっております。…」(1 頁から引用)。町会が抱えている今日的状況が記され、住民の生活状況の本質、大正末期以降の町会の歴史、新しい町会のあり方、行政との関係、町会運営と活動の方向がまとめられている。この中では、阪神淡路大震災における地域社会の対処まで言及されている。

「町会のあり方」と「生かしの地域づくり」は合冊本として、弘前市町会連合会から出版されており、誰もが手にとることができる。弘前市民にはこの 50 年にわたって、町会とはどのようなもので、どのように活動すべきなのかといういわば指南書が存在してきたのである。このことは全国の都市を見渡してみても一般的な状況ではない。住民の主体性を学び実践しようとする弘前市を証明する状況といえることができる。

活性化を待つ町会

多くの都市の例にもれず、弘前市も人口が減少し高齢世帯が増加している。高齢者のみの核家族世帯や高齢者のみの単身世帯が多くなった。同時に、家族の対応を家族自身がもてあますようになった。家族と地域の間にある単位町会の役割が注目されているが、そんな動きがとれていない。町会が続けてきた祭等の催ものの多くは参加者が少ない。町会そのものを支える役員もなり手を探すのが大変であり、高齢化している。

その一方で、住民主体の地域づくり、市民主権システムづくり等が唱えられている。町会の活性化がその基礎にあることはわかっているのだが、この時代にどのように進めたらいいのか、答えを出せないでいるというのも弘前市の町会(町内会)の実態である。

以下の調査結果はこのことの特効薬ではないが、あらためて実態を表現し課題を明らかにすることで町会の活性化に寄与しようとしている。

檜 貢

2012 年 3 月

参考文献

田中重好『共同性の社会学—祭・雪処理・交通・災害—』ハーベスト社 2007 年

弘前市町会連合会 合冊版『「町会のあり方」について—町会とはどういう組織か、増補版生かしの地域づくり』

2000 年